

## 少子化と家族、そして父親

榎場 雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

少子化問題は先進国の趨勢となり、日本はその最先端国として、40 余年になります。少子化の進行は、合計特殊出生率（1 人の女性の生涯出産率）が 1985 年の 1.57 ショック以降にも下降を続け、2014 年には 1.42 までになりました。加えて人口の激減も深刻で 2060 年には、日本の人口は 88 百万人まで激減することが予測されています。その要因として人口の都市集中化、核家族化、社会保障制度や社会福祉制度の発展、女性の社会進出、晩婚化・非婚化などが挙げられています。このような諸々の要件により、現代人は「家」をまもるという考えが薄れ、「老後は子どもに託す」思想も条件も次第に失われつつあります。これが少子化現象を更に進めてしまっています。

こうした状況のなかで子どもたちが示す、さまざまな問題行動も、家庭および家庭環境の変化と密接に関連しています。教育評論家の間でも、「日本の家庭の閉鎖性」と「父親の心理的不在」が厳しく論じられています。

その実例ともなる、「思春期の子どもをめぐる R 家の家族の物語」を紹介します。

第一報は R 家の母親から、「中 3 の長男が中 1 の次男をいじめる。そのいじめ方は尋常ではない。服装のこと、持ち物のことから言葉遣いまで口を出し、言う通りにしないと殴る蹴るの暴力を加え、まるで、学校の悪質な部活動で上級生が下級生を“しごく”と言われるような様相を見せている。私（母親）が『どうして自分の弟をいじめるの』と注意すると、『いじめではない。放っておくと、弟のためにならない』と言い張る」と声を詰まらせながらの訴えでした。

一方的な母親からの訴えからは、窺い知ることはできないが、兄の胸の奥深くに詰まっている、無念さがあるのではないかと同時に、父親の存在が気になるところでした。

その印象を正直に母親に伝えたところ、母親は堰を切ったように、「実は父親、つまり私の夫は県立高校の教師で、私の高校時代の憧れの先生だった。私は高校を卒業後、短大で保育を学んで、保育園に勤めていた。卒業後 5 年目の同窓会で「恩師と卒業生」の関係で再会し、愛が芽生えて、抑えられなくなってしまった。ところが、私は R 家のひとり娘で、両親は“家”に対しての拘りが強く、結婚に当たって大きな障壁になってしまった。その間に私は妊娠してしまい、夫は悩んだ末、自分が入り婿として、R 姓になることを了承して、障壁を乗り越え、ふたりして結婚届を出した。従って、戸籍の上では私が世帯主となっており、長男の誕生は「できちゃった結婚」によることを物語っている。思えば長男の次男に対する『いじめ』はこの戸籍謄本を見てからのように思う」と、一気に話してくれました。

「ご長男は正義感が強く、真直ぐに育っていると思った。弟さんに対する『いじめ』とも思える行為も、実は大人に対しての不信感や、抗議の裏返しではないかと、その思いが深くなった。ここは、間違いなく、お父さんの出番ではないかと、強く感じた。今、私に話してくださった、お父さんとお母さんの若かりし日のことを、お父さんの口から、素直にありのままを話して上げてはどうか、とのみ伝えました。母親は全く反論せず、「外堀から埋めることですね」と言い、返事を待たずに「父親に伝えます。もし問い合わせがあったら、対応してあげてください」と優しく言いました。

一週間後に、父親から電話が入りました。「先週、家内が長男の常軌を逸する弟いじめのことを相談した際に、長男の胸の奥深くに詰まっている無念さにふれ、父親の出番を指摘されたと聞き、ハッとした。今さらに、と言われそうだが、父親として為さねばならないと考えていたことだった。土曜日（学校の休日）に母親も交え、両親の若き日のことを正直に話した。言い訳がましいことはいらないと聞いていたが、話しているうちに自ずから過ちにもふれ、懐妊を知ったときには喜びが大きく、どちらがどちらの姓になるか、などという問題は何でもないことに思い、結婚届を出したいきさつも正直に話した。それが戸籍上に明らかに残って、子どもを苦しめることになるまでは考えもしなかったと、その浅はかさを素直に謝った。息子は黙って聞いて、最後まで『わかった』と言っただけだった。その日の夕食は、妻の心づくしのすき焼きだった。家族4人がそろって同じ鍋をつつくなどは久しぶりのことで、うれしかった」と淡々と話してくれました。

それから2週間後、思いもよらなかった「後日物語」が父親の口から語られました。

長男にはA子という彼女がいた。或る日、彼女のカバンの中から男性用の避妊具が出てきたのを見てしまった彼は驚いて、その理由を聞くと、彼女は『今どきエイズ対策に持ち歩くのが常識よ』と笑って言った。息子は更に驚いて、その常識とやらを養護教諭に質したところ、教諭は『そうね、人それぞれだけれど、A子の言うことも確かね』と簡単にあしらわれた。『納得できない。まるで援助交際を暗黙に認めているように思った。お父さんは、どう思う？』と問題を突き付けられた。

結局は『A子とは別れた。弟に対してのいじめは、養護の先生に対する怒りの裏返しというか、八つ当たりだった』と言い、慰められたが、背負わされた荷物の重さに変わりがない」と結びました。

とまれ、この件ひとりRさんだけの問題ではないと思えてなりません。Rさんにこれを告げると、Rさんは、「私も教師として、個人の問題とは考えられません。しかし個人的な事例として俎に乗ります。『ふれあい社会』で取り上げ、問題提起して頂くと幸いです」と言いました。

R家の「父と子物語」は更なる続々編がありました。これも父親からの話です。

或る日、息子から「お父さん、お風呂に一緒に入ろう」と誘われ、喜んで応じたところ、入って早々「ぼくの小さいよね」と言われ、一瞬なんのことかと思っただが、包茎に悩んでいると分かった。なるほど、やや見劣りするが年齢的なことも考え、「年頃になると勃起する回数が増え、その度に亀頭の先がしっかり現れてくるようになる。露出しきれていないことを心配になっているようだが大丈夫だ。時々反転させて、白い汚れを取り除き、清潔にしておくことだよ」と、さらりと言ってやれた。性的なことも、あっさりともじめに言えたことで、『男親である』ことが実感できた、と言います。「母性化時代の父親の役割」も提示されたようです。

少子化については、ともすれば子どもの出生数とセットにして論じられがちですが、子どもの数が少ないからこそ、少ない子どもを、より健全に育てることこそ、大人としての務めではないでしょうか。そして「人間関係のシステムとしての家族」を考えるべきではないでしょうか。

### 〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日 毎週木曜日 午前9時～午後9時

相談担当 榎場主任相談員 電話番号 04-7100-8369 個人情報は厳正に取り扱います。

〈市民のまなざし〉★得も言われぬ「父と子の心の交流」物語に接しました。★自分の悩みを語ることで、この長男は社会の病巣に鋭い刃を突き付け、多感な思春期の中学生の徳育の現状に警鐘を鳴らしているかのようです。★新宿でたまに献血した時のこと、献血者の中に若い女性が結構多いことを意外に思いつつ、日本もまだ捨てたものではないと悦に入った覚えがあります。後日、エイズ検査が目的だと知って愕然としたのですが。★教育現場ではこの保健の先生の対応が常識ですか、世の風潮だからと黙認ですか、free-sex や援助交際が普通の家庭の子女にまで蔓延すればどうなりますか、こんな考えは戦前思想の残響ですか（h）。 独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業